

目的 帯は、着物を引き立たせる重要な役割を果たすものである。特に後姿のポイントには帯にあり、その帯の種類、結び方はいろいろあるが、今回は最も多く用いられている名古屋帯のお太鼓結びについて、結びやすくお太鼓柄が希望通りの位置に出るようにするため、結び方の違いにより生ずる手の長さ、お太鼓山の變化について、着装実験を行ない検討する。

方法 裁縫書による名古屋帯の寸法設定方法を調査し、被験者の体格に合わせた帯を用い、お太鼓結びにする。お太鼓の大きさは27cm、重ね8cm、手の始末はお太鼓幅の両端に2cm出るように結ぶことを条件とし、手と重ねの結び方4種：①背中心で手結びにし、結び目をたてにして手を反対方向に廻した場合、②背中心で手結びにし手は結んだときの自然の方向に廻した場合、③手と重ねを背中心で交差させ、仮紐をかけてこれを押えた場合、④止め金を用いてとめた場合の手の長さの相違と、お太鼓結びにしたときの結び目からお太鼓山までの距離について測定。

お太鼓山を形づくる帯枕の当て方2種：①両手を後に廻し帯枕を重ねのかげに当てて形づくる場合、②重ねを脇に持ってきて帯枕を当てた場合の結び目からお太鼓山までの距離について測定し比較する。

結果 結び方の違いによる手の長さについては、①の方法が最も寸法を長く必要とした。結び目からお太鼓山までの距離については、手結びより仮紐、止め金使用の場合の方が大であった。帯枕の当て方の違いによるお太鼓山までの距離については②の方が大であった。